

佛敎のカウンセリングの性格について

藤 田 清

佛敎はこれを一つの相談（カウンセリング）體系と見ることが出来る。これを理論的に體系化することは、直ちに實踐に役立つものとなるであろう。この體系を假に相談佛敎と呼ぶ。

根源

相談佛敎は、その根源を釋尊に發している。ことに梵天勸請に象徴せられる成道から初轉法輪への展開過程は重要である。

成道において釋尊の自覺せられたものは、主客、能所の對立を超えた不二の立場であり、相依相待の緣起の道理であつたと考えられる。成道直後、釋尊はこの自覺の内容は甚深難解であり、これを説くも效無きが故に、むしろ黙して法味を樂しむにしかずとせられたという。この時、娑婆世界の王梵天が現われて、衆生のために説法を乞ひ願つたと傳えられる。梵天勸請を心理的事實と見れば、これを神祕的體驗とし、あるいは幻想と解するものがでてくる。これを象徴的表現と

解する場合にも幾つかの説を生じる。單なる古代に共通する類型的な表現の問題と見るもの、社會的に解して、梵天すら釋尊の説法を勸請したということは、今や佛敎の勢力がバラモン敎を壓して、これに代る勢を示すとするもの、これを内面的に解して、智から悲への内的風光を示すとするものなどがある。この最後の説は、わたくしには極めて重要な説のように見える。インド民衆の最高神たる梵天が民衆のために願つたということは、民衆を代表してという意味であり、換言すれば釋尊がインド民衆の願を聞いたということである。聲なき願を聞いたといつてもよい。そのことはまたインド民衆の苦惱が、今や釋尊の苦惱となつたということである。成道の直後にあつては、釋尊はなおその自覺内容を、くりかえしくりかえし味わひ續けたものと見える。そこにおいてまったく自他のへだてが無くなら、一切衆生の苦惱をみずからの苦惱とする境地が展開する。そのことはまた一切衆生救濟の悲願となり、ここに説法の決意が生れるのである。梵天

勸請とは、かかる内的風光をさし示すものであろう。佛傳によれば、釋尊は成道直後その禪定の場所を再轉三轉したと傳えるが、それはこうした説くべきか、説かざるべきかの問題、さらに、誰に、いかに説くべきかの具體的な方法等についての苦慮を物語るものではあるまいか。

説法の決意とともに誰に對して、いかに説くべきかが當面の問題である。この甚深難解なる法を説いてわからせることのできる機としては、まずアーラーラ仙とウツダカ仙の二人が考えられたが、間もなく彼等がすでに亡き人であることがわかり、ここについての頃まで釋尊に近侍した五人の比丘、コーンダンニヤ、バツディヤ、ワツパ、マハーナーマ、アツサジがえらばれた。彼らは釋尊とわかれて後、鹿野苑にあつて修行を續けているという。かくして今日のブツダガヤからサルナートまで二五〇キロの道のりを説法のための旅にでられるのである。ここに「でかけて説く」という大悲の實踐が始まる。

説法の内容は中道と四諦に關してであつたという。しかし聖求經等の經典の傳えるところによれば、それは直ちに理解されたものではなく、まずコーンダンニヤがさとりをひらいてから後、最後の一人がさとりをひらくまでには、すくなからぬ日数を要したもののようである。この間の説法もあるいは數人を對象とし、あるいは一人を對象とし、また釋尊が説

き、またかれら相互にかたらしめる等、種々の工夫がこらされたものと思われる。とまれここに三寶が確立し、佛敎は釋尊の自内證たるにとどまらず、社會的存在となつたのである。

しかしわたたくしたちにとつてもつとも重要な意義を持つものは、敎團が釋尊を含めて六十一名に達したとき、鹿野苑を去つて各人それぞれの方面にわかれて傳道の旅に出るべきことを命ぜられた傳道宣言である。その中において釋尊は「二人して一つの道を行くことなかれ」といわれている。このことは、一人でも多くの人々に傳道したいという慈悲の心あらわれであるとともに、佛敎における自主性の尊重をもあらわしている。傳道者一人一人の自主性を尊重することは、また聞法者一人一人の自主性を尊重することにも通じる。ここに相手の立場に立ち、その好むところに従う同行としての一人對一人の説法、すなわちカウンセリングの性格が、佛敎における説法の徹底したあり方であり、應機説法の窮極の姿なることがわかるであらう。

態度

しからばその説法、カウンセリングはいかに行われるべきであらうか。そこにはおよそ三種の態度が考えられるであらう。第一のものは説法者を中心とするものである。この態度は、その極端なるものにおいては、折伏的な態度になるであらう。第二のものは聞法者を中心としたものである。この場

合、説法者は聞法者の自主性を尊重し、彼に聞き、彼を了解することをもつて主とするに至るであろう。この二種の態度に對して、これを折衷する第三の態度もまた容易に考え得られるであろう。この三種の態度は、今日のカウンセリング學界におけるカウンセラーを主とする指示的方法、クライエント（來談者）を中心とする非指示的、來談者中心的方法、ならびに折衷的方法に通じるものであり、この三種のあり方が依然としてカウンセリング學界の最大の問題なのである。

これに對して相談佛教のあり方はどうであろうか。緣起の道理から考えるとき、説法者と聞法者との關係は次のごとくであろう。説法者あるとき聞法者があり、説法者が生ずるとき聞法者もまた生じる。説法者なきとき聞法者もまたなく、説法者がなくなれば聞法者もまたなくなる、相依相待のものである。このように考えるとき、説法者中心というのも、聞法者中心というのも、ともに先任論に類するものであり、折衷的態度もまた相應論に類するものと考えられるから、佛教的態度としての中道は、これら三種の態度の何れでもないといわねばならない。しからば中道とはいかにあるべきものなのであろうか。

釋尊の説法の方法を總括して、「インド佛教文學史」の著者ヴィンターニッツは次のようにいつている。

佛は外見上、まず全然反對者の立脚地に立ち、反對者と同一見地

佛教のカウンセリングの性格について（藤 田）

から出發して、同じ議論の方法、ときには屢々同一術語まで使つて以て、不知不識の裡に反對者を、反對者かれ自身と全然反對なる見地に伴いゆくのである。（中野義照・大佛衛共譯による）

このあり方こそ中道的なるものではあるまいか。しかし全然反對者の立脚地に立ち、反對者と同一見地から出發して、同じ議論の方法、ときには屢々同一術語まで使いながら、反對者を、反對者かれ自身と全然反對なる見地に伴いゆくということは、いかにして可能なのであろうか。單に相手に同調するだけでは、相手を反對の見地に伴いゆくことはできないであろう。

方法

アンヨーカ王の統治下、パータリプトラで開催された佛典編集會議の座長となつたティッサに歸せられている論事という論書によると、このティッサの態度は次のようである。

一つの異解が提起せられてくると、その異解が、異解それ自身のままには停まりえないことを見出して、その異解が、退かねばならないような一つの結果をふくんでいることを證言してゆく。ここに、正統派の教義がおのずからあらわれてゆく。

これは、異解が、異解者の立場においてはそのまま許されながら、いつとなく、その異解が、退かねばならないような一つの結果、矛盾を含んでいることが明らかにされ、ついに正統派の教義に攝取されてゆくというあり方である。こう

したあり方をもつとも明確にしているものは「中論」における龍樹の態度だといわれる。それは、相手を不可能であるところのことに歸着せしめる歸謬法である。相手に同じながら、そこに相手の矛盾、困難を見出し、相手がそれを自覚することによつてその立場が轉換してゆくのである。

この場合説法者は相手に對してこれを對立的に否定するのではない。相手に即して、聞法者の立場からその矛盾、困難を明らかにしてゆくのである。指示するのではなく、自覺せしめるのであるといえよう。指示的でもなければ、非指示的でもなく、また指示的でもあり、非指示的でもあるというべきであろうか。

根據

今日相談方法の有效性については問題はないが、その可能性の根據は明らかではないようである。これに對して、佛教心理学は有力なる示唆を與えている。唯識論における轉識得智がそれである。わたくしたちは、相談過程において、聞法者の上にあたかも轉識得智を思わせられるような経過を見る場合が多い。歸謬法による否定的啓發を通して我執が破れるとき、わたくしたちは、ものごとのひずみのないありのままの姿をうつすことができるようになる。これを八識の轉じた鏡智のはたらきと考えることができよう。そこにおいては、それぞれが緣起においてあり、平等不二なるものとせられる。

これは七識の轉じた平等智のはたらきであろう。しかしそこに差別の相を見るとき、六識の轉じた觀察智のはたらきがある。この差別の上に具體的にはたらくものを成所作智とする。それは前五識の轉じたものとして、われわれの感覺の世界において實證せられるものとならう。

これらの智は説法者の上にもある。聞法者の問題がみずから問題となり、その問題にとりくみ、そのはたらきにおいて世間を清淨ならしめるものであるから、これを清淨世間智と考えることができよう。

佛教と科學

佛教を實踐的相談體系として考えるとき、それは著るしく科學と近似的である。すでに明らかにしたようにそれはまた、科學的カウンセリングに對して批判の原理ともなる。相談佛教は、緣起の故に空であり、空のはたらきとして能所の世間にはたらく清淨世間智をもつて主體とする。同事行として對象に即することは、あたかも科學と重なるようであるが、その本質は無的である。もとより佛教は科學を拒否するものではなく、科學的な業績はとつてもつて自家藥籠中のものたらしめねばならないであろう。

- 1 水野弘元氏、「釋尊の生涯」による。
- 2 中村元氏、「ゴータマ・ブツダ」による。
- 3 増谷文雄氏、「佛教百話」による。
- 4 舟橋一哉氏、「釋尊」による。
- 5 山口益氏、「佛教學序説」中の同氏説による。以上いずれも大意を取る。
- 6 舟橋一哉氏、「釋尊」による。
- 7 山口益氏、「アポロン佛」八七頁より引用。
- 8 Prasanga Sadhana この部分は山口益氏の説による。